

言語行動の発達 (VII)

母子相互作用における動作と言語
(生後3年間の縦断観察資料の分析)

東京大学教育学部教育心理学研究室 武 井 澄 江

明治学院大学教育学研究室 荻 野 美 佐 子

駒沢大学教育学研究室 大 浜 幾 久 子

国学院大学教育学研究室 齊 藤 こ ず ゑ

The Development of Verbal Behavior (VII)

Gestures and Language in Mother-Infant Interaction: A Longitudinal Study of the First Three Years

Sumie TAKEI, Misako OGINO, Kikuko OHAMA and Kozue SAITO

In the previous papers, the development of pointing in the context of a mother-infant interaction had been examined. In the present research, the development of gestures vis-à-vis linguistic behavior was examined. The data analyzed in the present paper were obtained in longitudinal home observations of 6 first born infants interacting with their mothers. Every interacting behavior by gestures and/or language or vocalization by infants at the moon's age of 3, 6, 9, 13, 17, 21, 24, 30, 36 was analyzed as well as every corresponding mother's interacting behavior. The developmental changes were revealed. The difference between pointing and other gestures was also discussed.

I 問 題

人間のコミュニケーションにおいては、言語の役割が最も重要であるが、その他に表情や動作の果たす役割の重要性も無視できない。このことは、すでに多くの人の指摘していることであり(Key, M.R. 1980; Raffler-Engel, W. 1981)、日常のコミュニケーション場面でも経験的に認められることである。それにもかかわらず、コミュニケーションにおける動作や表情の役割や性質は十分に解明されていない。

動作や表情に関しては、次のような問題を明確にする必要があるだろう。

まず、言語と動作の果たす役割について、特に両者の伝達機能の違いはどこにあるのか、動作は一般に考えられているように補助的機能を果たすだけなのかという問

題がある。さらに、言語と動作は複雑にからみあって同時的、継時的に出現する傾向があるが、この併用の仕方に何らかの一貫性やルールがあるのだろうか。例えば、言語の伝達機能として、要求や叙述などが考えられるが、このような機能の違いによって伴う動作の種類や併用の一貫性に差がみられるだろうか。以上のことは、大人のコミュニケーションにおける問題として、場面、状況、コミュニケーションの相手といった社会的文脈の影響、さらには文化差や個人差の影響を検討する必要がある。

そして、この問題は、発達の観点からみるとよりいっそう重要なものとなる。特に前言語期の子どもが動作、表情や発声という非言語的手段を中心として伝達する段階から、言語の優位な段階へと変化することを指摘する研究が多いが(Lock, A., 1978; Clark, E. V., 1978)、この動作から言語へという変化は現実のものなのか。ま

た、大人が言語獲得期の子どもに対して行う伝達行動では、動作がどのように使われ、大人自身の言語や子どもの発声との共起に一貫した関係がみられるのか、それは子どもの言語発達にいかに関わるのか。このような発達的問題に答えうる研究は、今のところ非常に少ない。日常コミュニケーションにおいて、動作が意識的にも無意識的にも重要な役割を果たしていることが認められている割には、大人の動作学的研究も、子どもの伝達行動、能力の発達における動作の役割に関する研究も、十分に行なわれているとはいえない。

我々は、子どもの言語あるいは伝達行動の発達に関わる重要な要因のひとつとして、母子相互作用における動作の役割に注目している。それは単に、言語の未発達な子どもの未熟な伝達手段の分類をするためではない。言語の未だ出現しない子どもにとって、動作がどのように大人の動作と同一の機能、形式（種々の体の部位の協応によりひとまとまりの動作の形式が成り立つ）を満たしていくのか、そして各種の動作がどのように言語と併用されるのか、そしてこの発達プロセスにおいて大人（母親）の動作使用の傾向に何らかの規則性があり、それが子どもの動作、言語の発達に反映されるのかどうか。これらを調べるのが我々の研究の目的である。すなわち子どもは母親との相互作用の中で、自分の動作、発声の形式を整え、意味機能を付与していく、そのプロセスで、母親の動作、言語行動がどのような役割を果たすのかを調べることに焦点があてられている。

我々は以上の観点から、主に指さし行動を中心として分析を行ってきた。（大浜他1981；辰野他1982；武井他1983；荻野他1984）この一連の研究では、伝達の指示行動として最も明確な形態を持ち、大人にも子どもにも用いられる慣習的非言語行動であることを理由に、指さし行動を動作の代表としてとりあげ、その機能および言語との併用の発達を調べた。また母親自身の指さし行動についてや、子どもの指さし行動に対する母親の言語、非言語的応答行動についても調べた。これらの研究結果から、子どもの指さし行動の機能的分化プロセスや、言語との併用の性質が明確になり、その発達プロセスにおける母親の解釈的モニタリング行動の役割が指摘された。そこで先にあげた問題については、指さし行動に関する限り、かなり明確になったものと考えられる。

しかし、指示的動作をも含め、伝達場面で何らかの意味を伝える役割を持つ動作は、言うまでもなく、指さし以外にも多く存在する。単に物をつかんでいることや、注視していることですら、その行動は、同時に発話された言語との関係で重要な意味を担い、伝達の相手によっ

てそれが解釈される。そこで、本研究では、指さしをも含め、より多様な動作をとりあげ、母親および子どもによるそれらの表出の発達的变化を調べる。また指さしに関する一連の研究から、指さしと発声あるいは言語とが規則的に併用される傾向があり、子どもはその規則を次第に身につけていくことがわかった。また、その併用の規則が、指さしに伴う言語行動の機能に依存していることもわかった。そこで本研究では、他の動作についても、言語の機能との併用の傾向を調べ、動作によって異なる併用傾向があるか否かを調べる。

II 方法

A 分析資料

6組の母子（男児4名、女児2名）の生後3年間にわたる縦断観察資料から、3, 6, 9, 13, 17, 21, 24, 30, 36か月の9月齢時の半統制場面の資料を分析する。半統制場面とは、観察者の持参した所定の玩具（人形、自動車、食器、積木など）を用いて母子で自由に遊ぶセッションである。10分間を1セッションとし、各母子各月齢につき1セッションの資料が分析された。記録は逐一筆記記録法により、母子の発声、発話及び動作を記述したものを、VTR録画で補完した。

B 分析方法

1. 相互作用行動

逐一筆記記録から、母子の発声、発話及び動作またそれらの複合的行動について働きかけまたは働きかけられた行動を取り出す（辰野他、1980）。これを相互作用行動とよぶ。

2. 相互作用行動の機能

相互作用における機能から、相互作用行動を次の4つに分類する（Kaye, K. et al. 1980）。

- | |
|---|
| <p><Unlinked turn>* 相手への働きかけを意図していないのだが、相手の行動をひきおこし、機能的には相互作用の開始行動となっている行動。</p> <p><Mand> 相手への働きかけを意図してなされた相互作用の開始行動。</p> <p><Response> 相手の <Unlinked turn> 又は <Mand>によってひきおこされた行動。</p> <p><Turnabout>一つの相互作用行動だが<Mand>と <Response>の二つの機能を合わせもっている行動。</p> |
|---|

* 以下< >は分類カテゴリを示す。

3. 相互作用行動の形式

上記4つの相互作用機能に分類した行動を次の3形式に分ける。

- <発声> 前言語的発声, 言語などの発声。
- <動作> 動作又は表情, 視線。
- <発声と動作> 発声と動作又は表情, 視線が同時的あるいは継時的に生じた複合的行動。

4. 動作カテゴリ

相互作用行動の形式が<動作>又は<発声と動作>における動作を次のカテゴリに分類する。

- <視線> 指示的視線。
- <リーチング> 物に手をのばす。
- <もつ> 物をもつ, つかむ, うけとる。
- <さし出す> 物をさし出す。
- <物の操作> 物の機能に即した操作。
- <象徴遊び> 存在しない物の代用として他の物を用いる遊び。
- <象徴身ぶり> 象徴遊び以外の象徴的身ぶり。
- <受容> うなづき, ほほえみ, 受容的行動。
- <拒否> 首ふり, 拒否的行動。
- <指さし> 指さし, 腕さし。
- <その他> 上記以外の動作。

5. 言語カテゴリ

相互作用の形式が<発声>又は<発声と動作>における発声を, 機能と形式の側面から次のように分類する。

a 言語カテゴリ: 形式

- <喃語> 非叫喚音からなる一連の音声, 意図の不明瞭な発声。
- <原初語> 日本語になっていないが, 文脈により伝達意図のわかる発声。
- <言語> 日本語の形をもち, 一貫した使用傾向の認められる発声。次の下位カテゴリに分類する。
 - <疑問>: <Wh 疑問> <Yes-No 疑問> <きき返し>に分類される疑問
 - <命令>: 「～ヤッテ」「～シテチョウダイ」などの命令。
 - <平叙>: 上昇イントネーションを伴わず, 単語又は文により述べたもの。
 - <その他>: <返事><歌・きまり文句><独言・掛け声>など。

b 言語カテゴリ: 機能*

- <行動要求> 「ユックリネ」「ソットネ」など, 具体的な行動を求める。
- <行動提案> 「～シヨウ」「～シタラ」「ナゼ～シナイノ?」などの行動提案。
- <説明要求> 「ダレ?」「ドコ?」「ドウシタノ?」「コレ女の子?」など, 命名や説明を求める。
- <明確化要求> 「ン?」「エッ?」など, 先行する発話の反復や明確化を求める。
- <注意喚起> 「シテノ!」「ワカル?」「気ヲツケテノ!」などの注意喚起。
- <禁止・拒否> 「イケマセン」「ヤメナサイ」「イヤダ」などの禁止や拒否。
- <教示・説明> 説明要求に対する答を含む, 教示・説明・報告。
- <内的表出> 自分の感情の表出, 相手に対する評価など。
- <受容・了解> 「ソウネ」「ソウシヨウ」などの受容・了解やなだめ。
- <皮肉> 言語表現と意図とのずれのあるもの。
- <相手を意識しないもの> 生返事, 歌, きまり文句, 独言など。
- <その他> ききとれないもの, 意味不明のもの, 及び上記のいずれにも該当しないもの。

* Dore, J. 1978 を参照した。

Ⅲ 結果と考察

A 相互作用行動数

母子の各月齢における相互作用行動数を表1に示す。

表1 相互作用行動数

月 齢	母 親		子 ども	
	総 数	セ ッ シ ョ ン 平 均	総 数	セ ッ シ ョ ン 平 均
3	287	47.8	212	35.3
6	458	76.3	409	68.2
9	462	77.0	392	65.3
13	586	97.7	486	81.0
17	621	103.5	532	88.7
21	673	112.2	586	97.7
24	702	117.0	696	116.0
30	614	102.3	565	94.2
36	621	103.5	732	122.0

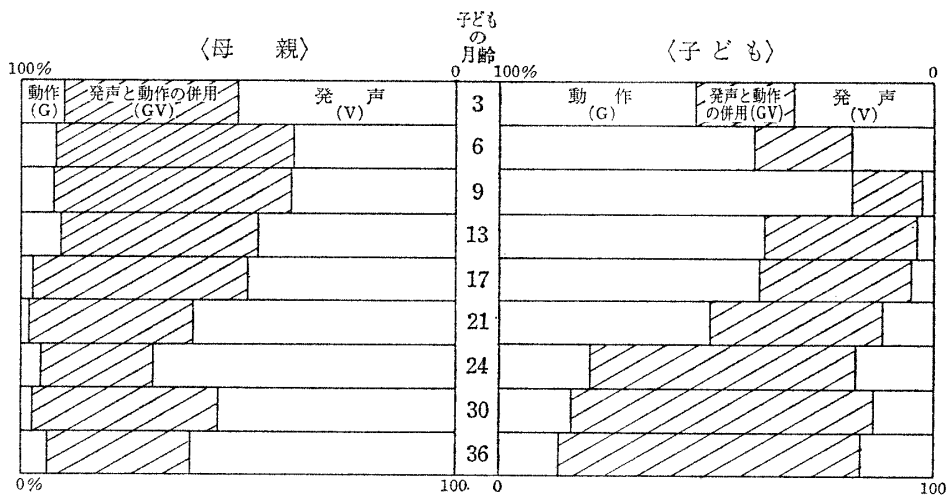


図1 相互作用行動に占める各形式の割合

3か月では母子ともに少ないが、子どもの月齢に伴って増加し、10分セッションあたりの母親の平均行動数が13か月で約100となる。また子どもの平均行動数も21か月以降100前後となる。母親の行動数が13か月まで増加し、以後一定になることから、生後一年の間に二者の間に相互作用の基盤が形成されると考えられよう。また、子どもの行動数が21か月まで増加、以後一定となることから、二年目以降に子どもの相互作用行動における質的な発達が予想される。

B 相互作用行動の形式——発声と動作

図1に相互作用行動に用いられる動作(G)・発声(V)・動作と発声の併用(GV)、各形式の割合を月齢別に示した。母親の行動の90%以上は発声を伴うものであり、動作のみのもの(G)は極めて少ない。発声と動作の併用(GV)は6か月から17か月まで特に多く50%前後を占める。21か月以降は減少するが、25%~40%は併用である。次に、子どもの行動をみると、3か月では発声(V)の割合が他月齢に比べてかなり多いが、6か月、9か月では動作のみ(G)の割合が増加し、9か月では80%以上を占める。しかし、13か月以降は発声と動作の併用(GV)の割合が増加、特に24か月になるとそれまで半数近くを占めていた動作のみ(G)が激減し、かわって発声と動作の併用(GV)が大半を占めるようになる。また、6か月以降減少傾向を示し9か月から17か月までは5%未満にすぎなかった発声(V)も21か月以降増加し、10%~18%を占める。

生後一年目の相互作用の成立には主に相互作用行動としての動作の発達が、また2年目以降の相互作用の質的な発達には、動作と発声の併用の発達が寄与していると思われる。

以下では相互作用行動としての動作の発達を、発声と

の併用を中心としてみていく。

C 相互作用に用いられる動作

1. 動作カテゴリ

各動作カテゴリについて、月齢ごとの全相互作用行動に占める割合を表2の上段に示した。さらに、その個々の動作カテゴリの中で発声と併用される割合 $(\frac{GV}{G+GV} \times 100)$ を下段に示した。

①子どもの月齢に伴う各動作の変化(表2-1)

<視線>: 3か月では40%を占めるが6, 17, 21か月で減少する。21か月までは動作のみの方が、24か月以降は発声と併用されて用いられる方が多くなる。

<リーチング>: 6か月で急増、6, 9か月で多い。9か月までは動作のみの方が、13か月を境に17か月では併用される方が多い。

<もつ>: 3か月ですでにみられ、6か月で急増する。17か月までは動作のみ、21か月を境に、24か月以降では併用が多い。

<さし出す>: 9か月で出現、13, 17か月で急増する。<もつ>とは対照的に出現直後から発声との併用が多い。

<物の操作>: 6か月まではみられないが、9か月ではかなりの割合を占める。17か月で増加。24か月以降、発声との併用が多くなる。

<象徴遊び>: 9か月で出現、13, 17, 21か月と増加する。なお、9か月での象徴遊びは5事例で、うち3事例は応答的行動であった。30か月以降、発声との併用が多くなる。

<指さし>: 13か月で出現。出現時から発声との併用が多い。21か月で増加する。

表 2-1 各動作カテゴリの全相互作用行動に占める割合% (子ども)

月齢	視線	リーチング	もつ	さし出す	物の操作	象徴遊び	象徴身ぶり	受容	拒否	指さし	その他	総行動単位数
3	40.4 28.0	1.4 64.3	9.0 57.8	—	—	—	—	—	0.9 100.0	—	16.5 25.5	212
6	29.1 17.5	9.5 28.4	31.6 27.2	—	—	—	—	0.2 0.0	0.2 100.0	—	10.5 51.4	409
9	35.4 12.1	8.9 16.9	25.0 19.2	1.6 18.8	12.5 6.4	1.3 0.0	—	0.3 0.0	0.3 0.0	—	12.2 35.2	392
13	25.7 25.7	5.2 48.1	23.4 35.9	4.2 50.0	12.1 35.5	6.0 31.7	1.8 22.2	1.0 80.0	4.7 29.8	3.3 69.7	9.0 47.8	486
17	15.4 22.1	4.5 66.7	21.3 31.9	8.3 74.7	20.1 23.4	9.4 40.4	0.2 0.0	2.3 17.4	1.4 42.9	2.1 81.0	10.3 43.7	532
21	10.0 39.0	2.1 33.3	13.1 59.5	6.6 77.3	20.2 17.8	20.6 38.8	0.9 77.7	1.2 16.7	1.2 16.7	7.4 97.3	5.3 41.5	586
24	11.9 68.9	1.2 91.7	14.1 88.7	10.5 90.5	19.3 56.0	10.7 60.7	1.4 92.9	1.2 25.0	0.2 50.0	8.4 98.8	3.4 70.6	696
30	6.3 66.7	0.9 77.8	19.0 85.8	6.7 89.6	17.0 63.5	21.0 86.7	—	0.6 66.7	—	8.0 100.0	9.5 77.9	565
36	8.8 59.1	1.2 91.7	22.2 88.7	9.2 92.4	16.9 82.2	14.2 91.5	0.1 100.0	2.2 50.0	1.1 72.7	1.5 100.0	6.0 75.0	732

各月齢の下段の数値は各動作が発声との併用で用いられる割合(%)を示す。

表 2-2 各動作カテゴリの全相互作用行動に占める割合% (母親)

月齢	視線	リーチング	もつ	さし出す	物の操作	象徴遊び	象徴身ぶり	受容	拒否	指さし	その他	総行動単位数
3	3.5 60.0	—	6.6 74.2	10.1 90.1	9.7 75.3	1.0 100.0	—	—	—	—	19.2 81.8	287
6	2.4 62.5	—	7.4 70.3	26.0 92.3	15.5 84.5	6.1 96.7	—	1.1 81.8	0.9 100.0	0.4 100.0	3.1 77.4	458
9	2.2 40.9	0.4 100.0	11.3 88.5	7.8 80.8	18.0 91.7	13.2 98.5	0.2 100.0	0.2 0.0	—	1.3 100.0	8.0 76.3	462
13	6.1 75.4	0.5 60.0	9.2 92.4	8.7 77.0	13.3 72.9	5.8 100.0	0.9 100.0	1.6 56.3	1.2 75.0	1.2 100.0	6.1 95.1	586
17	1.6 87.5	0.2 100.0	9.1 93.4	6.3 92.1	12.6 92.1	14.0 97.9	0.3 100.0	0.8 37.5	—	2.9 100.0	4.4 100.0	621
21	1.1 90.9	—	5.9 94.9	4.6 93.5	6.8 98.5	14.5 97.2	0.9 100.0	2.6 73.1	—	1.9 100.0	1.0 70.0	673
24	2.9 20.7	—	7.7 94.8	3.7 97.3	7.1 95.8	2.0 85.0	0.1 100.0	1.7 58.8	—	3.2 87.5	2.3 87.0	702
30	2.8 46.4	—	12.2 95.1	4.6 100.0	6.3 95.2	12.5 100.0	0.5 100.0	1.7 64.7	—	2.9 100.0	1.8 100.0	614
36	5.5 56.4	0.5 100.0	7.9 89.9	3.9 87.2	3.3 81.8	4.9 95.9	1.0 80.0	3.4 61.8	0.6 100.0	3.6 94.4	4.7 93.6	621

各月齢の下段の数値は各動作が発声との併用で用いられる割合(%)を示す。

表3-1 各動作の相互作用機能

子どもの月齢	動作 相互作用機能	視線		リーチング		もつ		さし出す		物の操作	
		G	GV	G	GV	G	GV	G	GV	G	GV
3	Unlinked	9.3	*	—	*	*	36.8	—	—	—	—
	Mand	—	5.8	—	—	—	—	—	—	—	—
	Response	61.6	17.4	*	*	31.6	*	—	—	—	—
	Turnabout	*	*	—	—	—	—	—	—	—	—
6	Unlinked	14.3	5.9	23.1	12.8	34.9	15.5	—	—	—	—
	Mand	*	—	*	—	*	*	—	—	—	—
	Response	66.4	11.8	28.2	15.4	35.7	9.3	—	—	—	—
	Turnabout	*	—	*	—	—	—	—	—	—	—
9	Unlinked	12.9	5.8	22.9	14.3	35.7	15.3	—	—	67.3	*
	Mand	*	*	*	—	*	*	*	*	*	—
	Response	69.8	3.6	37.1	*	40.8	*	*	—	22.4	*
	Turnabout	*	*	22.9	—	*	—	—	—	—	—
13	Unlinked	11.2	12.0	*	*	20.2	14.9	—	*	11.9	22.0
	Mand	4.0	7.2	*	40.0	9.6	8.8	30.0	35.0	25.4	10.2
	Response	58.4	4.8	20.0	—	32.5	11.4	*	—	25.4	*
	Turnabout	*	*	*	—	*	—	*	*	*	—
17	Unlinked	4.9	*	*	37.5	30.1	16.8	—	13.6	32.7	15.0
	Mand	*	6.1	—	*	*	6.2	20.5	52.3	*	*
	Response	68.3	9.8	25.0	*	31.9	4.4	*	*	36.4	*
	Turnabout	*	*	—	*	*	4.4	*	*	4.7	*
21	Unlinked	*	*	*	*	13.0	16.9	—	*	27.1	10.2
	Mand	*	15.3	*	*	*	31.2	17.9	53.8	16.9	*
	Response	54.2	16.9	*	—	27.3	10.4	*	*	24.6	5.1
	Turnabout	—	*	—	—	*	*	—	20.5	13.6	*
24	Unlinked	*	15.7	—	*	*	23.5	—	*	17.2	15.7
	Mand	*	14.5	—	*	*	42.9	*	60.3	8.2	20.1
	Response	25.3	16.9	—	*	5.1	11.2	*	*	9.0	5.2
	Turnabout	*	21.7	*	—	*	11.2	*	23.3	9.7	14.9
30	Unlinked	—	16.7	—	—	4.7	18.7	*	—	13.5	19.8
	Mand	*	25.0	—	*	—	40.2	*	78.9	—	22.9
	Response	30.6	16.7	*	*	9.3	15.9	—	*	21.9	14.6
	Turnabout	*	*	—	*	—	11.2	*	*	*	6.3
36	Unlinked	*	*	*	*	3.7	22.2	*	*	8.1	24.2
	Mand	—	21.9	—	*	*	42.6	*	61.2	*	29.0
	Response	29.7	17.2	—	*	6.8	14.2	—	*	7.3	16.1
	Turnabout	7.8	17.2	—	*	—	9.9	*	23.9	*	12.9

とその月齡的变化 (子ども)

象徴遊び		象徴身ぶり		受 容		拒 否		指 さ し		そ の 他		発声のみ V
G	GV	G	GV	G	GV	G	GV	G	GV	G	GV	
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	54.3	17.1	70.1
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	*	—
—	—	—	—	—	—	—	*	—	—	20.0	*	29.9
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	27.9	37.2	70.1
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	*	—
—	—	—	—	*	—	—	*	—	—	20.9	11.6	29.9
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
*	—	—	—	*	—	—	—	—	—	47.9	33.3	80.0
*	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
*	—	—	—	—	—	*	—	—	—	14.6	*	*
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	*	—	—
—	*	—	*	—	—	—	*	—	—	11.4	27.3	29.4
17.2	*	*	—	—	*	*	—	*	37.5	13.6	*	—
48.3	17.2	*	—	*	*	60.9	*	*	*	18.2	*	64.7
*	—	*	*	—	*	*	*	*	*	*	*	*
16.0	16.0	—	—	—	—	—	*	—	*	34.5	20.0	34.6
14.0	12.0	—	—	—	—	*	—	*	45.5	*	9.1	*
28.0	*	—	—	50.0	*	*	*	*	*	16.4	*	57.7
*	*	*	—	*	*	*	—	—	*	*	*	—
17.4	*	—	*	—	—	—	—	—	*	35.5	*	15.2
9.9	22.3	—	*	—	—	—	—	—	51.2	—	*	9.1
23.1	10.7	*	*	85.7	*	85.7	*	*	18.6	22.6	*	65.2
10.7	*	—	—	—	—	—	—	—	18.6	—	*	10.6
14.9	18.9	—	—	—	—	—	—	—	—	*	29.2	13.9
9.5	17.6	—	*	—	—	—	*	*	72.9	—	*	13.9
6.8	16.2	*	*	62.5	—	*	—	—	10.2	20.8	*	38.5
8.1	8.1	—	50.0	*	*	—	—	—	15.3	—	29.2	33.6
*	32.8	—	—	*	*	—	—	—	*	*	17.5	10.5
*	18.5	—	—	—	—	—	—	—	48.9	*	32.5	25.0
6.7	26.9	—	—	—	—	—	—	—	26.7	17.5	*	50.0
*	8.4	—	—	—	—	—	—	—	15.6	—	*	14.5
*	57.7	—	—	*	*	—	—	—	—	*	31.8	7.4
*	9.6	—	*	*	*	—	—	—	90.9	*	15.9	10.7
*	14.4	—	—	*	*	*	75.0	—	*	15.9	20.5	52.5
*	9.6	—	—	*	—	—	—	—	—	*	*	29.5

数値は各月齡の子どもの各動作カテゴリを100とした場合の割合 (%) *は出現頻度が5未満のもの
—は出現頻度が0のもの

表3-2 各動作の相互作用機

子どもの月齢	動作 相互作用機能	視線		リーチング		もつ		さし出す		物の操作	
		G	GV	G	GV	G	GV	G	GV	G	GV
3	Unlinked	*	—	—	—	*	*	—	—	—	—
	Mand	*	*	—	—	*	57.9	*	61.5	25.0	60.7
	Response	*	*	—	—	*	—	—	—	—	—
	Turnabout	—	*	—	—	—	*	*	*	—	*
6	Unlinked	—	—	—	—	*	*	—	—	—	14.1
	Mand	—	45.5	—	—	20.6	47.1	4.2	72.5	12.9	62.0
	Response	*	*	—	—	*	*	*	6.7	*	*
	Turnabout	—	*	—	—	*	*	—	13.3	*	*
9	Unlinked	*	—	—	—	*	19.2	—	—	*	8.4
	Mand	—	*	—	*	*	42.3	13.9	52.8	*	56.6
	Response	50.0	—	—	—	—	13.5	*	—	—	7.2
	Turnabout	—	—	—	*	*	13.5	*	27.8	*	19.3
13	Unlinked	—	*	*	—	*	*	—	—	*	10.3
	Mand	—	25.0	—	*	*	38.9	17.6	58.8	*	37.2
	Response	25.0	25.0	—	*	*	31.5	*	*	*	12.8
	Turnabout	—	22.2	—	—	—	20.4	*	15.7	14.1	12.8
17	Unlinked	—	—	—	*	*	*	—	*	—	15.4
	Mand	—	50.0	—	—	—	31.6	*	64.1	*	55.1
	Response	*	—	—	—	*	33.3	—	*	*	12.8
	Turnabout	—	*	—	—	—	22.8	*	15.4	*	9.0
21	Unlinked	—	—	—	—	—	—	—	—	—	23.9
	Mand	—	*	—	—	—	44.7	*	54.8	—	39.1
	Response	—	*	—	—	*	34.2	—	*	*	17.4
	Turnabout	*	*	—	—	—	21.1	*	25.8	—	17.4
24	Unlinked	—	—	—	—	*	9.3	—	—	—	22.0
	Mand	—	*	—	—	—	37.0	—	46.2	—	40.0
	Response	70.0	—	—	—	*	24.1	—	—	*	20.0
	Turnabout	*	*	—	—	*	24.1	*	50.0	—	14.0
30	Unlinked	—	*	—	—	*	9.3	—	—	—	15.4
	Mand	—	*	—	—	—	36.0	—	75.0	—	25.6
	Response	52.9	*	—	—	*	33.3	—	*	*	33.3
	Turnabout	—	*	—	—	—	16.0	—	17.9	—	20.5
36	Unlinked	—	*	—	—	*	*	—	*	*	*
	Mand	—	23.5	—	*	—	16.3	*	54.2	*	23.8
	Response	41.2	20.6	—	*	*	30.6	*	—	*	*
	Turnabout	*	*	—	—	*	36.7	—	*	—	28.6

数値は各月齢の母親の各動作カテゴリを100とした場合の割合(%)

*は出現頻度が5未満のもの

—は出現頻度が0のもの

能とその月齡的变化 (母親)

象徴遊び		象徴身ぶり		受 容		拒 否		指 さ し		そ の 他		発声のみ V
G	GV	G	GV	G	GV	G	GV	G	GV	G	GV	
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	*	25.5	28.2
—	*	—	—	—	—	—	—	—	—	*	40.0	33.8
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	*	10.9	33.8
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	*	*	4.2
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	*	7.7
*	92.9	—	—	—	*	—	*	—	*	—	*	28.4
—	—	—	—	*	*	—	*	—	—	*	*	57.4
—	*	—	—	—	—	—	*	—	—	*	*	6.5
—	9.8	—	—	—	—	—	—	—	*	*	*	11.6
—	57.4	—	—	—	—	—	—	—	*	*	35.1	14.5
—	14.8	—	—	*	—	—	—	—	—	*	24.3	58.4
1.6	16.4	—	*	—	—	—	—	—	*	*	13.5	15.6
—	17.6	—	—	—	—	—	—	—	—	*	*	5.3
—	38.2	—	100.0	—	—	—	*	—	*	—	30.6	18.0
—	20.6	—	—	*	*	*	*	—	—	*	25.0	52.6
—	23.5	—	—	—	*	*	—	—	*	—	33.3	24.1
—	14.9	—	—	—	—	—	—	—	*	—	*	3.7
*	47.1	—	*	—	—	—	—	—	55.6	—	55.6	25.6
*	19.5	—	*	*	*	—	—	—	—	—	*	45.1
—	16.1	—	—	—	*	—	—	—	33.3	—	22.2	25.6
—	6.1	—	—	—	—	—	—	—	—	*	—	3.0
*	32.7	—	*	—	—	—	—	—	46.2	—	*	22.4
*	43.9	—	*	27.8	72.2	—	—	—	—	—	*	47.5
*	14.3	—	*	—	—	—	—	—	53.8	—	—	27.1
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	*	31.3	2.7
*	*	—	*	—	—	—	—	*	52.2	—	*	15.2
*	*	—	—	41.7	58.3	—	—	—	*	—	*	45.1
—	42.9	—	—	—	—	—	—	—	*	—	*	37.0
—	22.1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	*	2.1
—	20.8	—	—	—	*	—	—	—	83.3	—	45.5	15.3
—	37.7	—	*	*	*	—	—	—	*	—	*	47.6
—	19.5	—	*	—	*	—	—	—	*	—	—	35.0
—	30.0	—	—	—	*	—	—	—	—	—	17.2	1.9
—	26.7	—	*	—	*	—	—	—	22.7	—	34.4	14.6
—	20.0	—	*	38.1	47.6	—	*	—	*	*	20.7	37.6
*	20.0	*	—	—	*	—	*	*	54.5	—	20.7	46.0

②母親の各動作の変化(表2-2)

〈もつ〉：子どもの〈さし出す〉〈操作〉の出現、増加と対応して9, 13, 17か月で多い。

〈さし出す〉：子どもの〈もつ〉の急増と対応して6か月に多く、子どもの〈さし出す〉の出現する9か月以降減少する。

〈物の操作〉：3か月からかなりみられる。6か月以降増加、子どもの〈物の操作〉が増加する17か月までは13~18%を占める。が、子どもの〈物の操作〉が安定する21か月以降減少傾向を示す。

〈象徴遊び〉：子どもの〈象徴遊び〉が出現、増加する以前からかなりみられる。特に9, 17か月で多い。子どもの〈象徴遊び〉の割合が安定する21か月以降は子どもに対応して変化する。

〈指さし〉：子どもの〈指さし〉が出現するより早く、6か月からみられる。

ほぼ全月齢、全動作で発声との併用の方が多くみられる。特に〈指さし〉〈象徴遊び〉〈物の操作〉〈さし出す〉で発声との併用が顕著である。

以上から、生後一年間の動作レパートリーの増大が明らかになった。すなわち、3か月では動作のレパートリーは少なく、用いられる動作の多くは〈視線〉である。しかし、6か月では子どもの物に対する興味や運動能力の増大に伴い、〈リーチング〉や〈もつ〉が相互作用行動として盛んに用いられる。この時期、母親の行動には〈さし出す〉が多く、頻繁に子どもに物を介した働きかけを行っていると思われる。そして9, 13か月とレパートリーが増加。9か月では〈さし出す〉が、13か月では〈指さし〉が出現している。

また、発声と動作の併用に関して、母親の動作には発声が伴うことが多いが、子どもの動作については、出現直後には発声が伴うことは稀であり、ほとんどの動作は24か月以降発声を伴うようになることが示された。しかし〈さし出す〉〈指さし〉といった動作にはその出現時から発声が伴っていることも明らかになった。この二つの動作には相手の注意を求めるという共通性があることから、動作の性質によって、また相互作用上の機能の違いによって、発声との併用の重要性が異なることが予想される。

2. 動作の相互作用機能

次に、各動作およびその発声との併用について相互作用機能との関係を見る。

表3に、各月齢、各動作カテゴリごとに相互作用機能の割合を動作(G)、動作と発声の併用(GV)にわけて示

した。

①子どもの各動作の相互作用機能とその月齢的变化(表3-1)

〈視線〉：視線のみ(G)は一貫して〈Response〉に用いられることが多い。発声との併用(GV)の機能は月齢により異なる。すなわち、6か月までは視線のみ(G)同様〈Response〉に用いられる。しかし9, 13か月になると〈Unlinked turn〉(以下〈Unlinked〉と略す)の方が多くなる。母親はこの頃、視線に発声が伴うと、それを相互作用開始の合図とみなし応答していることがわかる。これには併用される発声の発達の変化が関連していると考えられる。〈Unlinked〉としての機能は17, 21か月では減少し、かわって〈Mand〉および〈Response〉が多くなる。24か月以降は〈Turnabout〉としての機能も多くみられるようになる。

〈リーチング〉：この動作の多くみられる6~17か月の間、動作のみ(G)では一貫して〈Response〉として機能することが多い。発声と併用されると〈Unlinked〉または〈Mand〉として機能する。

〈もつ〉：動作のみ(G)ではやはり一貫して〈Response〉が多いが、〈Unlinked〉として機能することも、特に17か月までに多い。一歳半ばかりまで母親は子どもが物をもつと何らかの反応をする傾向があるといえよう。発声を伴うとその傾向はさらに強まり、一貫して〈Unlinked〉が多い。ただし動作のみ(G)では21か月以降〈Response〉の方が多くなるのに対して、併用(GV)では、21か月以降は〈Mand〉として機能することが多くなる。

〈さし出す〉：これまでみてきた〈視線〉〈リーチング〉〈もつ〉の動作のみ(G)と異なり〈さし出す〉の動作のみ(G)は〈Mand〉として機能する。しかしこの動作のみが用いられるのは13~21か月で、24か月以降はほとんどみられなくなる。一方、発声との併用(GV)では13か月以降一貫して〈Mand〉として機能する。また21か月以降は〈Turnabout〉として機能することも多い。

〈物の操作〉：動作のみ(G)では〈Unlinked〉として機能することが多い。この傾向は低月齢で特に著しく、2歳頃まで母親は子どもの物の操作には敏感に反応していることがわかる。また、これまでみてきた動作のみと同様〈Response〉として用いられることも多い。発声と併用(GV)されるとどの月齢でも、〈Unlinked〉として機能することが多いが、24か月以降はそれ以外にも〈Mand〉〈Response〉〈Turnabout〉と多様に機能する。

〈象徴遊び〉：動作のみ(G)では13, 17か月に〈Res-

ponse>として機能する。21か月になると<Unlinked><Turnabout>として機能することも多い。発声との併用(GV)では21か月では<Mand>として機能するが、24か月以降<Unlinked>として機能することが多くなる。

<指さし>:動作のみ(V)で用いられることはほとんどなく、常に発声と併用(GV)される。一貫して<Mand>として、また21か月以降は<Response><Turnabout>として機能する。

他方、発声のみ(V)に関しては、9か月までそのほとんどが<Unlinked>であり、低月齢では子どもが発声すると母親はそれに反応し相互作用に引き入れていることがわかる。しかし、13か月以降<Unlinked>は激減し、<Response>としての機能が急増する。さらに24か月以降は<Turnabout><Mand>としての機能の占める割合も多くなり、多様な機能を果たすようになる。

②母親の各動作の相互作用機能とその月齢的变化(表3-2)

<物の操作>の6か月、13か月で動作のみの行動が僅かにみられるが、それ以外では発声を伴う(GV)。

<もつ>:発声と併用されて30か月まで<Mand>として用いられることが多い。ただし、13か月以降は<Response>および<Turnabout>として機能することも多くなる。

<さし出す>:発声との併用は一貫して<Mand>または<Turnabout>として機能する。

<物の操作>:<Mand>として機能するほか、6か月以降<Unlinked>として機能することもある。

<象徴遊び>:<Mand>が多いが、9か月以降<Unlinked>として機能することもある。

母親の発声を伴う<物の操作><象徴遊び>は子どもをひきつけ相互作用に導く傾向があるといえよう。

<指さし>:30か月までは<Mand>として機能することが多い。36か月では<Turnabout>として用いられる。

他方、発声のみ(V)では30か月までは<Response>として機能することが最も多い。36か月では<Turnabout>が最も多くなる。

以上、動作(G)および動作と発声の併用(GV)について、相互作用機能との関係からその発達の様相が明らかになった。すなわち、動作のみ(G)であると、一般に、月齢変化に伴う機能の変化はみられず<Response>として機能することが多い。ただし<もつ><物の操作><象徴遊び>といった物を扱う動作の場合には<Unlinked>として機能することも特に一歳半までで多い。これは

子どもの物の扱いに対するこの時期の母親の敏感さを示している。一方、発声との併用の場合(GV)は月齢に伴う機能の変化のみみられることが多い。その変化は<Unlinked>(又は<Response>)から<Mand>,<Turnabout>へということが多い。ただし、<象徴遊び>と発声との併用は高月齢になるほど<Unlinked>が多くなる。

これら併用(GV)での機能変化に対しては、発声の発達が寄与するところが多いと思われる。

そこで次に発声行動の発達を明らかにし、その上でさらに動作と発声の併用の意味を検討していく。

D 相互作用行動に用いられる発声

1. 言語カテゴリ(形式)

図2-1に子どもの発声を含む相互作用行動に占める各言語カテゴリ(形式)の割合を月齢別に示した。

3か月では発声の全てが喃語であり、その後減少するものの9か月までは発声の $\frac{2}{3}$ を喃語が占めている。しかし13か月では16%に激減、24か月以降はほとんどみられなくなる。原初語は6か月で10%を占め、その後増加、13、17か月では70%前後が原初語であるが、以後21、24か月と激減する。言語は9か月で僅かにみられる。ただし、それは<独言・掛け声>に限られる。しかし、13か月では<平叙><返事>といった形式も出現、17か月ではさらに<命令>および一例ではあるが<Wh疑問>もみられるようになる。言語は21か月で急増、全発声の84%を占めるが、この21か月には言語カテゴリの全ての形式が出現する。

母親の発声形式の子どもの月齢による変化については

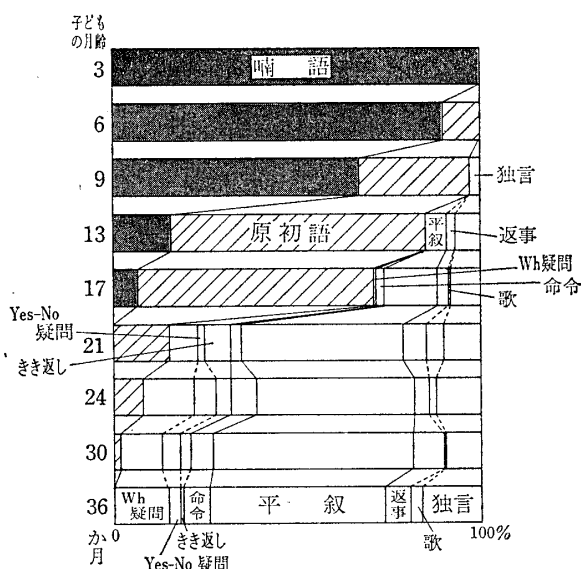


図 2-1 言語カテゴリ(形式)の変化(子ども)

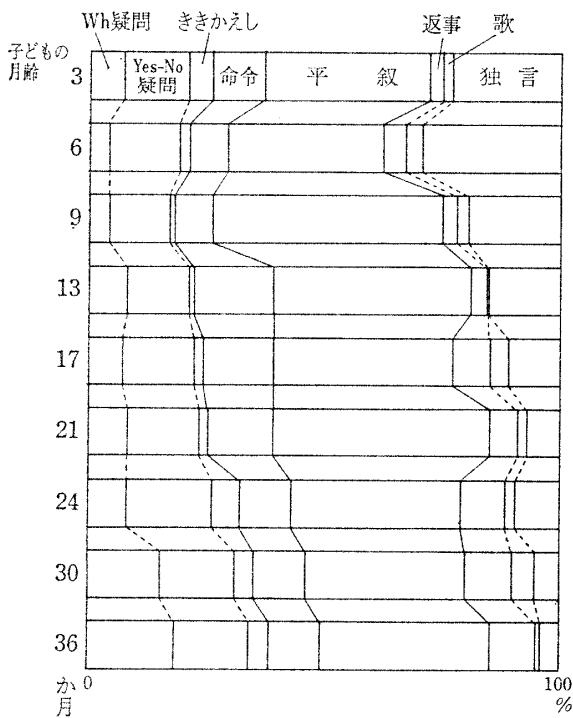


図 2-2 言語カテゴリ(形式)の変化(母親)

図 2-2 に示した。子どもの<平叙><返事>の出現と対応して、13か月で<命令><Wh 疑問>に増加傾向が、また子どもの<Wh 疑問><命令>の出現に対応して、17か月に<返事>が増加する傾向がみられる。ただし、<命令>は24か月以降やや減少する。これに対して<Wh 疑問>は30か月以降さらに増加する傾向がみられる。

子どもの発声と動作との併用(GV)では21か月から24か月の間で急増がみられたが、言語カテゴリ(形式)の発達からみた大きな変換点はそれ以前17か月から21か月にかけてあることがわかる。

2. 言語機能

相互作用行動に用いられる子どもの発声(動作と併用されているものも含む)のうち、特に言語をとりあげ、その機能の月齢による変化を表4-1に示した。

6名中5名に言語の出現している13か月以降をみていく。13か月では<教示・説明><受容・了解><注意喚起>及び<相手を意識しないもの>といったカテゴリがみられる。このうち<教示・説明>は35%と最も大きな割合を占める。相手の働きかけに応ずる<受容・了解>も23%と次に大きな割合を占めているが17か月以降減少する。17か月では相手に具体的行動を求める<行動要求>や<注意喚起>が増加する。しかし21か月で減少。21か月ではそれらにかわって命名、説明を求める<説明要求>が増加する。この21か月には新しく<明確化要求><内的表出>といったカテゴリも加わる。24か月ではさらに<行動提案><禁止・拒否>も出現、全てのカテゴリが出そろった。

なお<教示・説明>は13か月から36か月までどの月齢でも最も多くの割合を占めている。

次に母親の言語機能の子どもの月齢による変化を表4-2に示す。

9か月までは相手の注意を促す<注意喚起>が多い。しかし13か月以降減少。かわって具体的な行動を求める<行動要求>や、命名や説明を求める<説明要求>が増加する。また13か月までは相手や自分の気持ちについての言及<内的表出>が多いが、17か月以降は減少していく。

なお、13か月で増加する<行動要求>は24か月以降減少傾向を示す。一方<説明要求>はさらに増加していく。この24か月以降、相手の働きかけに応ずる<受容・了解>がやや増加傾向を示す。母親の場合も、子どもと同様、言語機能としては全般に<教示・説明>が多くの

表 4-1 言語機能の変化(子ども)

言語機能 子どもの月齢	行動要求	行動提案	説明要求	明確化要求	注意喚起	禁止・拒否	教示・説明	内的表出	受容・了解	皮肉	相手を意識しないもの	不明・その他
13	7.7	—	—	—	19.2	—	34.6	—	23.1	—	15.4	—
17	14.8	—	1.6	—	26.2	—	39.3	—	11.5	—	6.6	—
21	8.8	—	12.4	8.0	12.7	—	42.2	1.6	8.4	—	5.6	0.3
24	7.3	3.5	20.7	4.7	11.2	1.2	37.2	3.0	8.7	—	2.2	0.6
30	8.5	1.1	14.2	2.8	10.3	0.7	50.3	1.3	9.2	—	1.5	1.1
36	0.7	1.5	16.8	1.2	7.9	2.3	42.1	3.5	7.4	—	10.2	1.3

数値は各月齢の言語総数を100とした場合の各項目の割合(%)

表 4-2 言語機能の変化 (母親)

言語機能 子どもの月齢	行動 要求	行動 提案	説明 要求	明確化 要求	注意 喚起	禁止・ 拒否	教示・ 説明	内的 表出	受容・ 了解	皮肉	相手を意 識しない もの	不明・ その他
3	10.3	6.6	4.9	4.1	18.5	1.2	19.3	16.9	8.6	—	8.6	—
6	10.0	2.4	7.6	1.7	28.8	2.4	22.0	13.2	8.5	0.2	2.9	0.2
9	10.9	3.9	4.6	1.0	21.1	2.7	35.1	12.3	5.8	0.2	2.4	—
13	17.7	4.2	10.8	1.2	8.8	6.9	29.4	12.1	6.2	—	2.5	0.2
17	17.1	4.2	13.2	1.6	10.3	2.6	24.6	5.3	11.1	0.8	3.4	0.6
21	16.5	2.9	19.1	2.9	6.2	1.4	32.6	7.7	9.4	—	1.5	0.3
24	10.6	2.7	24.0	6.1	6.7	0.8	28.4	4.9	13.4	—	2.4	0.5
30	10.2	3.9	28.8	4.7	4.2	0.5	28.6	3.1	11.2	—	4.6	0.8
36	8.5	3.3	30.7	4.0	2.8	2.6	30.5	3.8	11.3	—	2.4	—

数値は各月齢の言語総数を 100 とした場合の各項目の割合 (%)

割合をしめる。

以上、子どもの動作と発声の併用に変化のみられる 9～13か月及び24か月において、母親の言語機能に大きな変化のみられることがわかる。また、子どもの言語機能は13か月から21、24か月の間で、すなわち一歳から二歳にかけて急速に発達していくことが示された。

では、このような発達を示す発声・言語機能と動作の関係はどのようになっているのだろうか。各動作と併用される発声および言語機能について次にみてみよう。

E 動作カテゴリと言語機能の関係

表 5 に出現頻度の比較的小さい<象徴身振り><受容><拒否><その他>を除く 5 つの動作について子どもの月齢ごとにその動作に併用される発声及び言語機能の割合を示した。

まず、子どもの動作と言語機能の関係をみてみる (表 5-1)。

<視線> : 9か月までは喃語、13か月、17か月では原初語と併用されることが多い。21か月以降は主に<教示・説明>と併用される。また<説明要求>との併用もかなり多くみられる。

<もつ> : 9か月までは喃語、13か月になると原初語と併用されることが多い。13か月で<教示・説明>といった言語機能と併用されることが僅かながらみられる。そして17か月以降<もつ>との併用はこの<教示・説明>が最も多くなる。なお、24か月以降では<説明要求>と併用されることもかなり多くみられる。

<さし出す> : 主に13か月以降併用がみられる。13か

月では原初語と併用されるが、17か月以降<注意喚起>と併用されることが多くなる。さらに24か月以降では<行動要求>や<教示・説明>とも併用される。

<物の操作> : 13か月以降併用がみられる。21か月までは原初語と併用されることが多いが24か月以降は<教示・説明>と併用されることが多くなる。また<説明要求>との併用もみられる。

<象徴遊び> : 13、17か月と原初語と併用される。21か月以降は<教示・説明>のほか<行動要求><受容・了解>また<内的表出><相手を意識しないもの>など様々な言語機能と併用される。

<指さし> : 13、17か月では原初語と併用される。21か月以降は<説明要求><行動要求><教示・説明>と併用されることが多い。

一方、発声のみをみてみると、9か月までは喃語、13、17か月では原初語が最も多くの割合を占める。ただ17か月では<教示・説明>といった言語機能もかなりみられる。言語が発声の大半を占めるようになる21か月以降については<教示・説明>が最も多いが、その他<受容・了解><説明要求>といった機能もかなりの割合を占めている。

次に母親の動作と言語機能の関係をみる (表 5-2)

<視線> : 13か月までは<内的表出>と併用されることがかなりみられる。しかし17か月以降<内的表出>との併用は減少し、かわって<説明要求>との併用が多くなる。36か月では<教示・説明>との併用が多くなるほか<受容・了解>との併用もみられる。

<もつ> : 3か月では<行動要求>との併用が最も多

表 5-1 動作と発声及び言語機能との関係 (子ども)

動作 月齢	視 線	リーチング	も つ	さし出す	物の操作	象徴遊び	指 さし	発声のみ
3	喃 語 100.0	(喃語)	喃 語 100.0	—	—	—	—	喃 語 100.0
6	喃 語 81.0 原初語 19.0	喃 語 60.0 原初語 40.0	喃 語 85.7 原初語 14.3	—	—	—	—	喃 語 98.6 原初語 1.4
9	喃 語 82.4 原初語 17.6	喃 語 50.0 原初語 50.0	喃 語 75.0 原初語 25.0	(喃語)	—	—	—	喃 語 100.0
13	原初語 77.4 喃 語 16.1 注意喚起 6.5	原初語 66.7 (喃 語 8.3 行動要求 8.3 注意喚起 8.3 教示説明 8.3)	原初語 57.9 喃 語 31.6 教示説明 7.9	原初語 80.0 (行動提案 10.0 相手を意識 しないもの 10.0)	原初語 71.4 喃 語 19.0 教示説明 9.5	原初語 44.4 受容了解 22.2 (喃 語 11.1 教示説明 11.1 相手を意識 しない 11.1)	原初語 100.0	原初語 44.4 喃 語 16.7 (注意喚起 11.1 教示説明 11.1 受容了解 11.1)
17	原初語 77.8 受容了解 11.1 (喃 語 5.6 教示説明 5.6)	原初語 92.9 教示説明 7.1	教示説明 41.2 喃 語 23.5 行動要求 17.6	注意喚起 58.3 喃 語 25.0 行動要求 16.7	原初語 72.0 (教示説明 8.0 受容了解 8.0)	原初語 65.0 (行動要求 10.0 注意喚起 10.0 教示説明 10.0)	原初語 55.6 注意喚起 22.2 (行動要求 11.1 説明要求 11.1)	原初語 45.7 教示説明 31.4 受容了解 8.6
21	教示説明 26.1 原初語 17.4 (行動要求 13.0 説明要求 13.0 注意喚起 13.0)	(原初語) (説明要求) (内的表出)	教示説明 41.7 原初語 20.8 (明確化要求 8.3 注意喚起 8.3)	原初語 36.7 注意喚起 30.0 教示説明 23.3	原初語 31.6 注意喚起 26.3 (喃 語 10.5 教示説明 10.5)	教示説明 31.1 行動要求 20.0 相手を意識 しないもの 17.8	教示説明 52.4 説明要求 35.7 原初語 7.1	教示説明 41.9 受容了解 20.3 明確化要求 16.2
24	教示説明 46.8 説明要求 12.8 注意喚起 10.6	教示説明 44.4 (行動要求 11.1 明確化要求 11.1 注意喚起 11.1 受容了解 11.1 相手を意識 しない 11.1)	教示説明 31.3 説明要求 27.7 注意喚起 13.3	(注意喚起 27.3 教示説明 27.3 行動要求 19.7)	教示説明 31.5 原初語 21.9 説明要求 17.8	教示説明 52.3 行動提案 11.4 受容了解 9.1	説明要求 65.5 教示説明 17.2 行動要求 8.6	教示説明 37.2 受容了解 18.2 説明要求 10.2

30	教示説明 54.5 説明要求 27.3 受容了解 9.1	(行動要求) (教示説明) (受容了解) (相手を意識しない)	教示説明 45.6 説明要求 25.6 注意喚起 10.0	行動要求 29.4 注意喚起 23.5 教示説明 23.5	教示説明 56.7 注意喚起 13.3 説明要求 10.0	教示説明 64.4 注意喚起 11.4 行動要求 7.9 受容了解 7.9	教示説明 73.3 行動要求 11.1 説明要求 11.1	教示説明 35.6 受容了解 21.8 説明要求 16.8
36	教示説明 14.5 説明要求 9.4 行動要求 3.1 受容了解 3.1	教示説明 75.0 行動要求 12.5 注意喚起 12.5	教示説明 44.2 説明要求 30.4 相手を意識しない 5.8	行動要求 27.4 教示説明 25.8 注意喚起 24.2	教示説明 56.2 相手を意識しない 18.0 説明要求 10.1	教示説明 44.2 相手を意識しない 22.1 内的表出 9.3	説明要求 54.5 行動要求 27.3 注意喚起 9.1 教示説明 9.1	教示説明 39.5 受容了解 20.4 説明要求 18.4

上位3位まで、上段より1位、2位、3位の順で示す。カギ付は同順位を示す。()で囲んだものは、各月齢における各行動カテゴリの出現総数が5未満のもの。——は出現総数が0のもの。表5-2についても同様。

表 5-2 動作と発声及び言語機能との関係 (母親)

動作 月齢	視線	リーチング	もつ	さし出す	物の操作	象徴遊び	指さし	発声のみ
3	(注意喚起) (内的表出)	——	行動要求 30.8 教示説明 23.1 行動提案 15.4 注意喚起 15.4 内的表出 15.4	注意喚起 42.3 教示説明 23.1 行動要求 15.4	注意喚起 43.8 教示説明 31.3 行動要求 18.8	(注意喚起) (禁止拒否) (教示説明)	——	内的表出 19.0 教示説明 17.9 注意喚起 12.3
6	説明要求 25.0 教示説明 25.0 内的表出 25.0 相手を意識しない 25.0	——	教示説明 34.8 行動要求 21.7 行動提案 13.0	注意喚起 54.5 教示説明 16.4 行動要求 13.6	注意喚起 32.8 教示説明 31.0 内的表出 12.1	注意喚起 50.0 教示説明 26.9 行動要求 11.5	(注意喚起)	内的表出 20.6 教示説明 18.3 受容了解 15.4
9	(内的表出) (行動要求) (相手を意識しない)	(説明要求) (教示説明)	教示説明 40.4 注意喚起 14.9 行動要求 10.6 行動提案 10.6	注意喚起 48.3 行動要求 20.7 教示説明 17.2	注意喚起 37.0 教示説明 32.9 行動要求 17.8	教示説明 47.5 注意喚起 30.5 行動要求 13.6	教示説明 66.7 注意喚起 33.3	教示説明 33.3 内的表出 18.3 受容了解 11.5
13	内的表出 33.3 行動要求 16.7 教示説明 12.5	(行動要求) (明確化要求)	教示説明 42.0 行動要求 20.0 内的表出 16.0	行動要求 53.8 注意喚起 17.9 教示説明 17.9	教示説明 37.8 行動要求 15.6 行動提案 11.1	教示説明 41.2 内的表出 20.6 行動提案 14.7	教示説明 57.1 行動要求 15.3 説明要求 13.9	教示説明 29.3 説明要求 15.3 行動要求 13.9
17	説明要求 55.6 行動要求 33.3 内的表出 11.1	(行動要求)	教示説明 30.8 受容了解 23.1 行動要求 15.4 説明要求 15.4	行動要求 30.9 注意喚起 22.2 教示説明 19.4	教示説明 31.4 注意喚起 24.3 行動要求 15.7	教示説明 27.8 行動要求 19.0 注意喚起 15.2	行動要求 44.8 教示説明 27.8 説明要求 22.2	教示説明 25.2 説明要求 17.0 受容了解 15.1

21	説明要求 50.0 行動要求 16.7 明確化要求 16.7 教示説明 16.7	—————	説明要求 26.3 教示説明 23.7 行動要求 21.1	注意喚起 44.8 行動要求 27.6 説明要求 13.8	教示説明 41.9 行動要求 16.3 説明要求 16.3	教示説明 46.8 受容了解 12.8 行動要求 11.7	説明要求 38.5 教示説明 38.5 行動要求 7.7 行動提案 7.7 内的表出 7.7	教示説明 31.1 説明要求 22.1 行動要求 17.4
24	(説明要求) (行動要求) (教示説明)	—————	説明要求 34.0 教示説明 26.0 注意喚起 10.0	行動要求 36.0 説明要求 24.0 注意喚起 20.0	教示説明 28.3 注意喚起 19.6 行動提案 17.4	注意喚起 41.7 教示説明 33.3 行動要求 8.3 説明要求 8.3 受容了解 8.3	説明要求 50.0 教示説明 35.0 行動要求 10.0	教示説明 28.8 説明要求 23.9 受容了解 16.0
30	説明要求 62.5 明確化要求 12.5 教示説明 12.5 相手を意識しない12.5	—————	説明要求 37.1 教示説明 25.7 受容了解 12.9	行動要求 32.1 説明要求 28.6 教示説明 17.9	教示説明 41.7 説明要求 19.4 行動要求 16.7	説明要求 26.0 教示説明 26.0 受容了解 15.6	行動要求 33.3 説明要求 22.2 教示説明 22.2	教示説明 33.7 説明要求 32.0 行動要求 9.6
36	教示説明 42.1 説明要求 21.1 行動要求 10.5 受容了解 10.5	(教示説明) (行動要求)	説明要求 34.9 教示説明 32.6 受容了解 11.6	説明要求 33.3 行動要求 28.6 教示説明 14.3	教示説明 47.1 説明要求 23.5 行動要求 5.9	行動要求 33.3 行動提案 16.7 注意喚起 16.7 教示説明 16.7 相手を意識しない16.7	説明要求 42.9 教示説明 33.3 行動要求 19.0	説明要求 32.7 教示説明 28.2 受容了解 13.5

いが、6か月～17か月ではそれにかわって<教示・説明>との併用が最も多くなっている。21か月以降<教示・説明>との併用もひきつづき多くみられるが、最も多いのは<説明要求>となる。

<さし出す>：9か月までは<注意喚起>と、13か月以降は<行動要求>と併用されることが多い。

<物の操作>：9か月までは<さし出す>同様<注意喚起>と併用されることが多いが、13か月以降は<教示・説明>と併用されることが多くなっている。

<象徴遊び>：6か月までは<注意喚起>と併用されるが、9か月以降<教示・説明>と併用されることが多い。また、21か月以降<受容・了解>、24か月以降は<行動要求><説明要求>といった様々な言語機能との併用も多くみられる。

<指さし>：主に9か月以降併用がみられる。9か月、13か月では<教示・説明>との併用が多いが、17か月以降では<行動要求>又は<説明要求>との併用が多くみられる。

一方、発声のみをみると、3か月、6か月では<内的表出>の占める割合が最も多く、次に<教示・説明>が多くなっている。しかし9か月では、これが逆転し、13か月以後は<内的表出>はほとんどみられなくなり<教示・説明>が最も多くの割合を占める。また<説明要求>の占める割合もかなり多い。

以上、子ども、母親ともに共通して動作カテゴリと言語機能との間にかなり一貫した関係がみられる。

すなわち<もつ>は<教示・説明>又は<説明要求>と併用されることが多い。また<さし出す>は<注意喚起>や<行動要求>と併用される。そして<指さし>は<説明要求><行動要求><教示・説明>と併用される。さらに<象徴遊び>は<教示・説明><行動要求>といったもののほか、<受容・了解><内的表出>など他の動作との併用があまりみられない言語機能とも併用されている。

なお、子どもと母親の併用関係は子どもの月齢があがるほどその類似性がより高まる傾向もみられている。

Ⅳ 討 論

A 言語発達における動作の意味

1. 相互作用行動としての動作と言語の併用

従来の言語発達研究においては、動作による伝達行動は言語出現の前提であり、動作が発声(言語)に併用さ

れるのは前言語期及び言語発達のごく初期に限られた一時的(又は過渡的な)現象とみなされる傾向があった。しかし、今回の分析では、動作が発声と併用される割合は発声が前言語(原初語)から言語へ移行しても減少せず、逆に発声のほとんどが言語となり又言語形式のレパートリーが整う21か月を越えて24か月以降、さらに増加していることが明らかになった。このことは、これまで

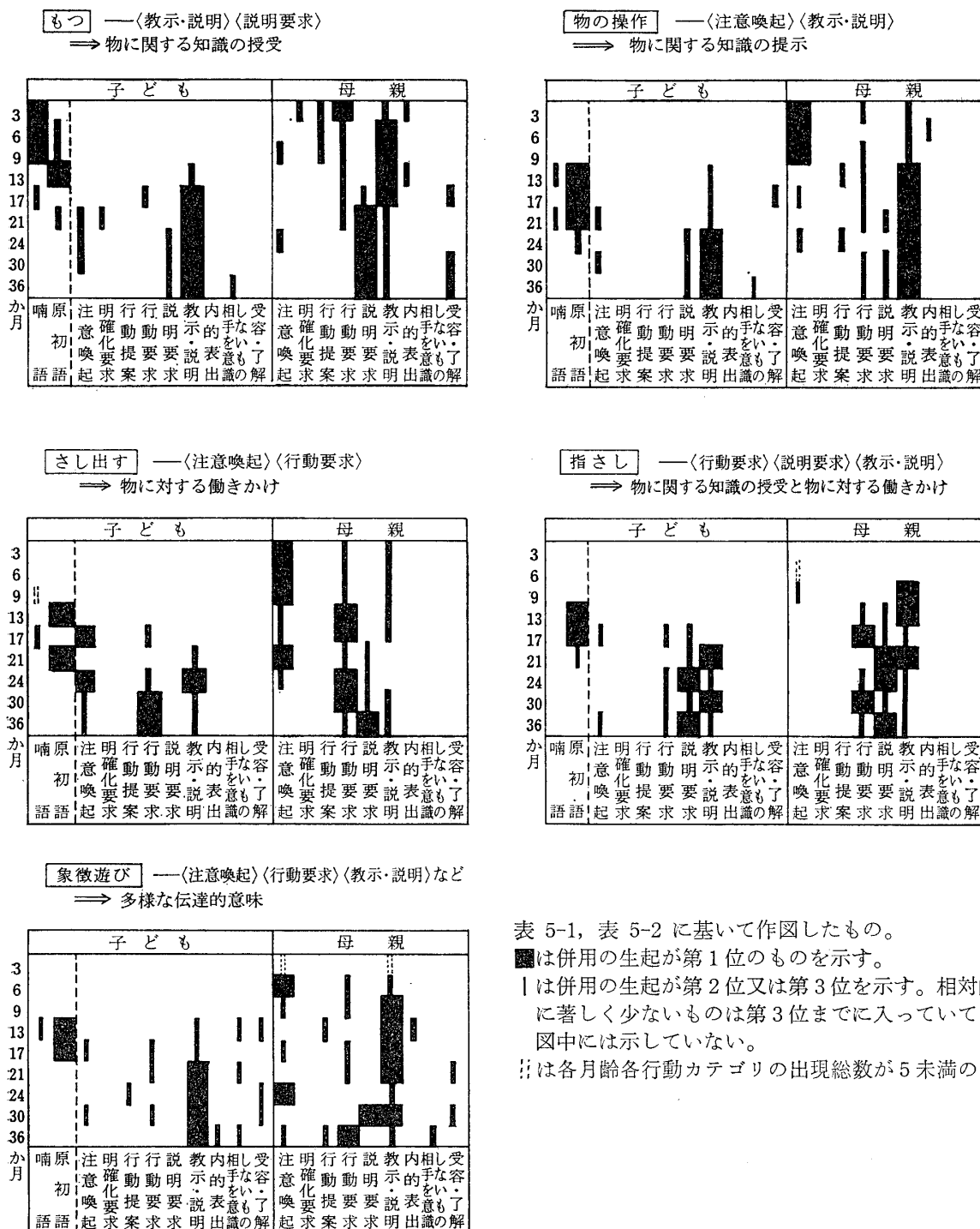


図3 主な動作と言語機能の併用の意味

表 5-1, 表 5-2 に基いて作図したもの。
 ■は併用の生起が第1位のものを示す。
 |は併用の生起が第2位又は第3位を示す。相対的に著しく少ないものは第3位までに入っていない。図中には示していない。
 ;は各月齢各行動カテゴリの出現総数が5未満のもの。

の我々の指さしの発達に関する研究(辰野他1982等)で示されてきた動作と言語の併用の意味に関する仮説「指さしと言語の併用には単なる過渡的な役割でなく、積極的な役割があり、子どもはそれを獲得していく」が単に指さしにとどまらず、他の伝達の動作にもあてはまることを示すものと思われる。また、今回の分析で動作と言語機能との間に、子どもと母親に共通してかなり一貫した関係がみられた。さらに、子どもの併用関係は月齢が高くなるほど、より母親(大人)のパターンに類似していくことも示された。このことは、動作と言語が併用されて、一つの伝達行動としての役割を果たしていることを裏づけるとともに、伝達行動としての動作と言語の併用自体の発達をも示唆していると考えられる。

各動作と言語機能の併用の意味とその発達の様相を図3に示す。

2. 言語発達を促す要因としての動作と言語の併用——<象徴遊び>と言語の併用

図3をみてもわかるように、動作と言語機能の併用関係の中で<象徴遊び>と言語の併用パターンは、他の併用とかなり異なっている。すなわち、他の動作とはほとんど併用のみられない、自分の気持ちの表出や相手への評価である<内的表出>や相手の行動を受け入れる<受容・了解>といった言語機能ともこの<象徴遊び>には強い結びつきがみられるのである。こういった<象徴遊び>に代表されるような動作と言語の結びつきは、前項で述べた併用されて一つの伝達の機能を担うものとは異なっており、言語出現以後の多様な言語発達を促進させる役割をもつと思われる。象徴遊びの中で様々な状況をつくり出し、様々な役割を演じ合うこと、一定の状況の中で動作をともなった言語を交換し合うこと、またそれが繰り返されることが、複雑なことばの習得を容易にしていると考えられるのである。こうした一語発話以降の言語習得に関連する動作の役割(動作と言語の併用の役割)については、さらに特定の動作(たとえば象徴遊び)のデータを分析することが必要だと思われる。なお、我々の母子の遊びに関する一連の研究(荻野他, 1981)で象徴遊びには、他の遊びに比べて、高度な言語が伴うことが指摘されている。

B 母子相互作用における母親の動作と言語

Zukow, P. G. et al. (1982)は、母親の言語的および非言語的インプットが相互に、子どもの前言語的伝達から言語による伝達への移行において果たす役割を明らか

にする目的で、1語文期の子どもと母親との間で自然に生起するやりとりエピソードを分析している。その結果、1語文期中期では、cross-modal redundancy(様相間冗長性)が顕著であったのに対し、後期では減少していた。そこで母親が言語に加えて動作でやりとりを促すなど、cross-modal redundancyを利用することが、1語文期の子どもの言語理解を容易にするのだろうと論じられている。

本研究では、1語文期に限らず、その前後の時期における母親の言語および動作の分析を行ったが、1語文期の後期以降でも言語と動作の併用に極端な減少はみられず、母親の言語と動作の併用を一時的な冗長性とみなすことは不適切である。Zukowらの結果は、物のやりとりという場面の制約によるものとも考えられる。物のやりとりエピソードは、本研究の<さし出す>と重なる部分が多いと考えられるが、母親の<さし出す>動作が動作全体に占める割合は、9か月以降10%未満であった。そこでZukowらのデータは、動作と言語の関係を論ずるための資料とするには量的にかなり限定されていると考えられる。また質的にも、<さし出す>は他の動作全てと同一の性質をもつわけではなく、物に関わる要求の機能を主に担う動作である。したがってやりとりエピソードにおける母親の動作と言語の併用は他の併用の代表としてよりは、特殊なひとつの併用とみなされるべきものといえよう。いずれにせよ、我々のデータでは、母親の<さし出す>と言語の併用の割合は3か月から36か月まで一貫して70%から95%の間であり、Zukowらのような、1語文期後期以降の減少はみられない。

また、Shatz, M. (1982)も母親の言語と手腕の動作の共起関係を調べている。その結果、動作を伴う発話の頻度は、子どもの加齢につれ(19か月から34か月の間)母親の全発話の43%から23%へ減少していた。そこでShatzの結果も我々の結果と不一致を示している。

以上の2つの研究と我々の結果の不一致の原因については、観察方法、分析方法の違いのほか文化差の可能性もあるかもしれない。しかし、おそらく最も重要なことは、観察し分析した動作の性質であろう。Zukowらは、先にも述べたようにやりとりの動作のみを扱っている。他方、Shatzは物をさし出す、操作する、指さす、つくくという動作を全ていっしょにして、言語との併用を論じている。このような分析方法では、個々の動作の固有の機能を見失うことになり、言語との併用に関してもその意味を十分に引きわめ難いものと考えられる。子どもの言語習得プロセスにおいて、母親の動作および言語と動作の複合化された行動の果たす役割は、子どもの月齢

範囲を十分にとり、かつ多様な動作の性質の違いを考慮して分析する必要があるだろう。それは母親の動作の果たす役割について、我々が現在までに手に入れている情報があまりに少なく、仮説をたてることすら困難な状況だからである。このような事態では、単純化したデータで結論を急ぐ前に、現象の十分な記述が必要なのではないだろうか。そこで我々は、前二者の研究結果にもかかわらず、母親の動作と言語の併用の果たす役割は、子どもの1語文期のある時期のみに限られるものではなく、かなり長期的な影響を及ぼすものとする。以下、我々の結果から得られた母親の行動の役割を検討してみよう。

母親の動作の使用については、子どもの動作の発達と対応した変化がみられていたが、併用される言語については、子どもの月齢にかかわらず、かなり一貫している部分と、子どもの月齢に伴って変化する部分との両面が認められた。一貫して併用される言語機能は、動作との複合化された行動として、固有の伝達の意味を担うものと考えられるものである。

図3に基いてこの点を検討してみよう。まず<もつ>は<教示・説明><説明要求>との併用傾向が一貫してみられ、もつことによって対象(物)を特定化し、対象に関する知識の伝達を行うものと考えられる。子どもについては<教示・説明>との併用傾向が13か月から、<説明要求>との併用傾向が24か月からみられ、母親によって示された動作と言語の併用を、子どもが獲得していくといえよう。さらに、相互作用の観点からみると、子どもの言語が未熟な時期は、母親は<教示・説明>を併用するが、子どもに<教示・説明>の併用がみられるようになると<説明要求>の併用へと切り換え、併用される言語により、相互作用における情報要求的なものとの情報提示的のものとの役割分化が、母子の間で明瞭になってくると思われる。このような母親の併用言語の一貫性と変化は、<指さし>における<行動要求><説明要求>との併用と<教示・説明>との併用にも認められる。

一方、<物の操作>や<さし出す>では、上の2つの動作に認められたのと同様の一貫性はあるものの、併用の役割分化は認められない。これらの動作は、相互作用の中で果たす特定化された役割をもつものであるためと考えられる。すなわち、<さし出す>は、対象(物)に相手の注意を喚起し、対象に対する何らかの働きかけを求める行動であり、<物の操作>は、対象(物)に関する知識伝達を、自ら物を操作して行動的に示すことによってなす行動であるためである。

なお<象徴遊び>は、多様な言語機能と併用され、一貫した併用傾向のみられないことは既に述べた通りである。象徴遊びは、他の動作とは異なり、固有の伝達の意味をもつというよりも、様々な象徴遊びの言語との併用により多様な伝達の意味をもつことができるため、このような特徴がみられると考えられる。

また、母親の動作と言語の併用について共通した特徴として、9か月頃まで<注意喚起>との併用が、多くの動作について認められることを挙げることができる。ただし、これは<もつ>や<指さし>では明瞭でなく、物をもつことや指示することはその行動だけで物への子どもの注意を喚起し、機能的に冗長となる注意喚起の言語を併用させることは特に必要なくなるためであろう。他の動作については、前言語期の子どもに対し、動作と注意喚起の言語を併用させることで、母親の動作への注目を求め、伝達の意味については、その動作自体が担っていると考えられよう。

以上、母親の役割を要約するならば、次のようなことがいえよう。

第1に、母親による言語の併用には、各動作固有の併用傾向があり、それは、子どもの発達が1語文期までに限定されず、少なくとも3歳頃まではこの特徴がみられ、むしろ、この月齢範囲では、高月齢になるほど、その傾向は顕著となる。このことは、動作と言語の併用が、固有の伝達の意味をもっており、母親は、積極的にそれを呈示することで子どもにこのような複合的行動を獲得させるモデルの役割を果たしている。

第2に、発達の初期には、母親の動作にまず子どもの注意を向け、動作の担う伝達の意味に気づかせるような働きかけを行っている。そして、子どもの言語習得が始まると、それらの動作に固有の言語機能を併用させることで、言語によって伝達される意味への注意を喚起しているといえる。このことは、子どもの言語習得を促進する一つの要素となっていると考えられる。

第3に、一つの動作が、相互作用における役割により、二つ以上の言語機能との強い併用傾向を示しうる場合、子どもがその一方の併用を習得し、使用がかなりみられるようになると、もう一つの併用を母親自身が行うことがみられる。これは、複数の言語機能との併用の習得を促進させるために母親が重要な役割を果たしていることを示していると考えられる。

V 今後の課題

本研究では、母子の相互作用における、言語、非言語

行動を分析し、動作と言語それぞれの機能と、特にそれらの併用の性質について詳しく分析した。その結果、指さしやその他の行動について、発声と言語との併用において、一貫した差異のあることが明確になった。

今後の研究課題としては次のことが考えられる。第1に、今回の分析では相互作用機能を4種に分け個々の相互作用行動をその4種類に分類することによってその性質を総括的にとらえてきた。そこで実際の母子の相互作用を時系列にそって十分に分析したものとはいえない。母子の相互作用の微視的分析によって、相互作用に用いられる言語、非言語行動の意味がより明確になるであろう。特に、今回分析した相互作用行動の単位についても、よりミクロな単位を利用することによって、視線や微細な体の動きといった現実の時間の流れでは一見組織化されていないようにみえる行動が相互作用の中で果たしている役割が明らかになるものと思われる。

第2に、今回の分析では相互作用行動の果たす役割、意味を中心に分析してきた、それはいいかえると相互作用の手段の持つ意味の分析であったといえる。今後は、母子の相互作用のより内容的側面について検討していきたい。母子が何をテーマとして相互作用を始め、それをどのように変更したり修正したりして、終結に至るのか、言語発達期におけるテーマ選択に特別な傾向があるのかなどを調べるのが重要であろう。

第3に子どもの言語面での発達により焦点をあてた分析を行う必要がある。子どもが自分のことばや伝達行動の影響力をいかにとらえているのか。相手に正しく理解されたか否かにどのくらい注意を払い、正しい理解に向けていかに自己の行動を修正するものなのか。逆に自己の理解プロセスをいかにモニターしているのか。不十分な理解だということをいかにして判断し、それを修正しようとするのか。などなど、多くの検討すべき問題が残っている。

文 献

Clark, E.V. 1978 From gesture to word: On the natural history of deixis in language acquisition. In J. S. Bruner & A. Garton (eds.). *Human growth and de-*

velopment. Clarendon Press.

Dore, J. 1978 Conditions for the acquisition of speech acts. In I. Markova (ed.) *The social context of language*. Wiley.

Kaye, K. & R. Charney 1980 How mothers maintain "dialogue" with two-year-old. In D. Olson (ed.) *The social foundations of language and thought*. Norton.

Key, M.R. 1980 *The relationship of verbal and nonverbal communication*. 2nd ed. Mouton.

Lock, A. 1978 *Action, gesture and symbol*. Academic Press.

荻野美佐子, 大浜幾久子, 辰野俊子, 斉藤こずゑ, 武井澄江
1984 言語行動の発達(Ⅳ) 子どもの指さし行動の発達と母親の応答行動(9から30か月児の縦断観察資料の分析) 東京大学教育学部紀要第23巻, pp. 128-158.

荻野美佐子, 大浜幾久子, 辰野俊子, 斉藤こずゑ, 武井澄江
1981 言語行動の発達(Ⅲ)——母子相互作用と象徴遊び(2から23か月児の擬似縦断資料の分析) 東京大学教育学部紀要第20巻, pp. 129-158.

大浜幾久子, 辰野俊子, 斉藤こずゑ, 武井澄江, 荻野美佐子
1981 母子相互作用における指さし行動の発達—時間標本資料の分析 教育心理学研究, 第29巻3号.

Raffler-Engel, W. (ed.) 1981 本名信行(編訳)「ノンバーバルコミュニケーション」大修館.

Shatz, M. 1982 On mechanisms of language acquisition: Can features of the communicative environment account for development? In E. Wanner & L. R. Gleitman (eds.). *Language acquisition: The state of the art*. Cambridge U. P.

武井澄江, 荻野美佐子, 大浜幾久子, 辰野俊子, 斉藤こずゑ
1983 言語行動の発達(Ⅴ)——母子相互作用における指さしと言語の機能(13から30か月児の縦断観察資料の分析) 東京大学教育学部紀要第22巻, pp. 43-59.

辰野俊子, 斉藤こずゑ, 武井澄江, 荻野美佐子, 大浜幾久子
1980 言語行動の発達(Ⅱ)——玩具を媒介とした母子相互作用(2から17か月児の擬似縦断資料の分析) 東京大学教育学部紀要第19巻, pp. 35-74.

辰野俊子, 斉藤こずゑ, 武井澄江, 荻野美佐子, 大浜幾久子
1982 言語行動の発達(Ⅳ) 絵本場面の母子相互作用における指さし行動(13から30か月児の縦断観察資料の分析) 東京大学教育学部紀要第21巻, pp. 77-88.

Zukow, R., Reilly, M., & Greenfield, P. 1980 Making the absent present: Facilitating the transition from sensorimotor to linguistic communication. In K.E. Nelson (ed.) *Children's language Vol. 3*. Gardner Press.

付記1 この研究に進んで御協力下さいましたお母様方に記して感謝の意を表します。

付記2 本研究の計算には東京大学計算機センターを利用した。